博士（文　学）　王　　安

学 位 論 文 題 名

感情事象モデルに基づく感情表現体系の研究

－日中感情表現の対照による試み－

学位論文内容の要旨

1）論文の構成

第1章　序論
1.1　研究目的　1
1.2　研究対象　7
1.3　内容概要と構成　9
1.4　用例の収集　14
1.5　用語の定義　16
第2章　日中感情表現の概観及び先行研究
2.1　日本語の感情表現　19
2.2　中国語の感情表現　30
第3章　感情と言語との関わり：感情事象モデル
3.1 はじめに　38
3.2 感情システムの構成と感情のメカニズム　39
3.3 感情と言語との関わり：感情事象モデル　51
3.4 本章のまとめ　57
第4章　日本語の感情表現の仕組み
4.1　はじめに　59
4.2　感情形容詞の意味特徴と機能　60
4.3　感情動詞の意味特徴と機能　86
4.4　本節のまとめ　109
第5章　中国語の感情表現の仕組み
5.1　はじめに　113
5.2　感情形容詞・動詞の描写性と機能　114
5.3　感嘆詞・感嘆表現の意味特徴と機能　129
5.4　使役構文による感情表現の意味特徴と用法　143
5.5　補語成分の修飾による感情表現　160
5.6　本章のまとめ　164
第６章　感情の普遍性と言語表現の多様性

6.1 はじめに 168
6.2 感情の表出 168
6.3 感情の情意性 177
6.4 感情の描写 195
6.5 感情の生起の場 218
6.6 本章のまとめ 223
第7章 結語
7.1 本稿の結論 225
7.2 日中感情表現体系の構成 229
7.3 終わりに 234
謝辞 235
参考文献 236
資料 249

（400字詰め原稿用紙換算約996枚）

2）審査の方法および経過

第1回 2005年12月16日 審査委員会発足 各委員に論文配布

第2回 2006年1月13日 論文内容検討（問題点等の指摘）・口述試験実施方針決定

第3回 2006年1月20日 口述試問

第4回 2006年1月20日 口述試験内容の検討 学位授与の可否の判定

第5回 2006年1月27日 審査報告書の原案の検討

3）論文内容

本論文は、人間に共通する主観的な感情経験を各言語がどのように言語化しているかをさぐるということを長期的な目標に据えて、その一つの試みとして、日本語と中国語の感情表現を対照しつつ、両言語が感情のメカニズムに応じてどのような独自の感情表現体系を築き、感情を捉えているのかを、認知言語学的手法を用いて解明しようとしたものである。

本論文は7章から構成されている。

第1章「序論」では、本論文の研究目的、研究対象と方法について述べている。

第2章では、日中両言語の感情表現に関する先行研究の概要と、その問題点を指摘したうえで、両言語の感情表現に対して新たな解釈を行っている。

従来、日本語の『嬉しい！』といった感情形容詞一語文は主語「私」が省略された表現であるとされ、また『彼は嬉しい』と言えないという、いわゆる人称制限は、第三者の感情が他人には認知できないからだという「認知問題」として扱われてきた。それに対し、『嬉しい！』と『私は嬉しい。』とは全く異なる認知プロセスを経た感情表現であること、すなわち従来の感情形容詞に関する研究が、感情そのものの主観的性格と感情を捉える表現の性質とを混同していたことを指摘し、特に日本語において人称制限の現象が見られるのは、言語表現上の違い、つまり各言語の性質の違いによってもたらされた現象であり、他人の感情を認識できないことによるものではないことを指摘している。

一方、中国語の感情形容詞には人称制限の現象は見られないと言われるが、中国語でも瞬時の

感情の表出を行う表現にはやはり人称制限の現象が見られるという重要な指摘をしている。

第3章では、感情と言語の間に存在すると考えられる汎言語的な関係を捉える感情事象モデルを提示し、各言語がどのように感情のメカニズムに応じてそれを明示化し捉えているのか、感情の性質や働きはどのように言語に反映されるのかといった感情と言語の関係について論じている。

第4章では、第3章で提示した感情事象モデルに基づき、日本語がどのような感情事象に応じて感情の表出と感情の描写を捉えているのか、その感情表現体系はどのように構成されているかについて、日本語の感情形容詞と感情動詞（「悲しむ」のような動詞と接尾辞「～がる」による動詞）を取り上げそれぞれの振る舞いと役割について豊富な例文を駆使して論じている。

前者の感情形容詞は表出性と表出機能を持つことを示し、従来の研究で指摘されてきた人称制限現象の性質とその起因に対し新たな解釈を行っている。

第5章では、感情事象モデルに基づき、中国語の感情表現が感情事象に応じて感情の表出と感情の描写をどのように捉えているか、その感情表現体系はどのように構成されているかについて論じている。

そこでは、中国語における感情形容詞は日本語のそれとは全く異なっていることを指摘している。中国語の感情形容詞・動詞は表出性を持たず、感情の描写機能を果たす形式であるため、日本語の感情形容詞に見られる人称制限の現象が存在しない。

一方、中国語における感情表出はどのように行われるかと言えば、それには①「哎呀」を初めとする感嘆詞（これは文脈によってショック・感動・怒り・驚きなどを表すことができる）②「真＋感情形容詞/動詞」のような感嘆表現③感情形容詞・動詞④感情使役叙述文⑤補語成分による修飾文がその機能を果たすが、その際は感嘆詞を除いて、すべて「真」という副詞を伴うのが特徴である。つまり、この「真」が表出機能を果たしており、これが使用されない場合は単なる感情の描写になるとしている。そして、「真」が使用される表現では主語が第1人称に限られ、その意味で中国語にも人称制限の現象が見られることになることを指摘している

第6章では、日中両言語の感情表現における4つの側面、つまり①感情の表出②感情の情意性③感情の描写④感情の生起の場をとりあげ、認知言語学における Grounding 理論を用いつつ論じている。感情が自然反射的表出の段階から意図的表出の段階に移行するにつれて、その情意性が低くなるという、日本語の『うれしい！』と『私はうれしい。』の二つの表現が全く異なった認知プロセスを経たものであることを論証している。つまり、前者はいずれも感情を表出したものではあるが、後者の主語である「私」が単に省略されたものではなく、両者には感情の情意性の違いがあるものと捉える。つまり、前者は「その場その時」に生じた感情であるのに対し、後者は話者の意図によって表出される感情の状態に対応するものとするわけである。

また、中国語の感情述語使役文が感情形容詞・動詞をVにとる場合、使役動詞が「使」「叫」「讓」のどれであれ、「－目的性」「－意志性」「＋結果性」という特徴を持ち、その機能は感情が感情対象による外的要因で、感情主の意志によらずに生じてくることを表す。そして、これが表出言語形式「真」の修飾を受けて、感情の表出として用いられるのである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　門　脇　誠　一

副　査　　教　授　　小　野　芳　彦

副　査　　教　授　　高　橋　英　光

学位論文題名

感情事象モデルに基づく感情表現体系の研究

－日中感情表現の対照による試み－

本論文の成果は次のように要約できる。

① 感情とそれを表現する言語との関係を考えるうえで共通の枠組みである、日本語の感情形容詞が持つ「人称制限」の問題をも含めて説明できる汎言語学的な感情モデルを提示したこと。

② 日本語の感情形容詞・動詞と中国語の感情形容詞・動詞とを、「表出性」「描写性」という二つの軸を立て、情意性の強弱と関連付けて論じることによって、人称制限の議論が解消されることになる点に大きな意義があると考えられる。

③ 中国語に関しても、新しい知見がいくつか主張された。

a. 中国語の感情形容詞・動詞は裸の形では表出性を持たず、描写性しか持たないこと。

b. 「真」という副詞は表出機能を果たす言語形式であり、他の程度副詞とは明らかに性質を異にしていること。

c. 感嘆詞と感情述語使役文が中国語の感情表現体系の中で非常に重要な役割を果たしていること。

以上の点を勘案し、本論文に対し審査委員会は以下のとおり評価した。

審査の過程において、内容に一部再考を要する箇所があること、また文章表現などに関し改善すべき点がいくつかあることが指摘されたが、本論文が日本語研究・中国語研究に対し新たな知見を提供した点は大いに評価できるものとみなすことができる。

本審査委員会は慎重に審査し、以上の理由に基づいて本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。